

起こっている現象を認識し見抜く方法に「実態把握」「分析」「解析」「千里眼」の4つのレベルがあります(六車流：流通理論)。

1つの出来事や現象をメカニズムに解明(原因と結果の因果関係とその波及効果を理論的に分解する手法)するためには、この4つの手法はどうしても必要なものです。

実態の把握(テーマは客観性)

起こっている現象を、だれにでも認識できるように「事実を客観的に表現」することです。多くの現象の中で、だれも気付いていないことや、うすうす気付いているが客観性に乏しいものを、統計的・ビジュアル的・文章的に表現しだれでもわかるように客観的に認識できるようにすることです。

実態の把握は事実を客観的に表現すること自体に目的があり、事実に関するコメント程度の要素を付加することです。

それゆえに、実態の把握は「なるほど、そうなっているのか!」が、わかることが目的です。

分析(テーマは論理性)

分析とは、起こっている現象を実態把握した後に、「実態の内容の意味を解明」し、かつ「実態の内容を相関関係や因果関係を解明」をすることです。実態の把握のみでは事実は理解できても、その意味や因果関係まではわかりません。「なるほど、そのような理由でそうなっているのか!それではこうすれば結果を変えることができるのか!」がわかることです。

解析(テーマは革新性)

分析が意味づけと因果関係の解明という現象という実態から出発しているに対して、解析とは、視点を変えて「あるべき姿と実態の比較検討」であり、かつ、「この実態があるべき姿から見て、どこに課題があるかを究明」することです。

起こっている現象自体が、実態の把握や分析では、正しいレベルなのか、良くないレベルなのか?また、どのレベルでの評価なのか?どこを改良すればいいのか?が見えてくる解明手法が解析になります。

SC論で言うならば、勝ちパターンへの成功のメカニズムと比較検討することにより、自らのSCの方向性が見えてくることを意味します。

千里眼(テーマは創造性)

千里眼とは、1を知って10を知るのとことわざのように、事実の把握 分析 解析から、さらに、先を読むことです。別名、アインシュタイン手法と言います。アインシュタインは地球上で観測あるいは解明できるごく少ない情報のレベルで、まだだれも行っていない宇宙を解明しました。正に、1を知って100兆を知ることです。SC論で言うならば、「客の曖昧模糊(あいまいもこ・明らかになっていないこと)のレベルのニーズを売り手の発想やアイデアで具現化」することや「だれも見えない深いメカニズムを卓越した感性で見抜くこと」です。

我々は、千里眼は無理(?)としても、百里眼、十里眼、一里眼程度の先見性は持ちたいものです。千里眼手法は、事実の把握・分析・解析の中から、1つの糸口を見つけ、相関関係と連鎖反応により仮説とアイデアを創出することです。

多くの現象を認識する手法として、「実態の把握(事実の客観性とコメント付加)」が中心ですが、分析(意味づけと因果関係の究明)でも、事実そのものの成功のメカニズムが不明確な段階での分析は意味をなさない場合があります。やはり、解析(あるべき姿と現象の比較)によって初めて勝ちパターンに対する自らのポジショニングが見えてきます。さらに、千里眼(客も見えないものを売り手が発見)まで高まると、抜群です。

SC内の「回転ずし」は、客の潜在ニーズを売り手の千里眼によって創出された業態です。

(株)ダイナミックマーケティング社³
代 表 六 車 秀 之